

人を育てる住まい

川崎 衿子

1 家事をする意味

生活が安全に快適に衛生的に営まれるには家事は不可欠である。どんな小さな単純な生活であっても家事は発生する。しかし家事に対する多くの人の反応は歓迎的ではない。家事労働の軽減、家事労働時間の短縮、そして家事からの解放は家事担当者の長年の夢でもあった。その結果家事は機械化、社会化、商品化が著しく進行し、いつでも、誰でも、簡単に、短時間に行うことが可能となった。

家事は休日無く労働と休息の区切りがつきにくい、家族へのサービスで賃金支払いがない、標準がないため評価の客観性がない、家族への愛情を基盤としている、領域が広範囲で他種類の仕事が含まれる、臨機応変、緊急対応が求められるなどの特長をもつが、これを否定的にみるか、肯定的にみるかによって家事に対する態度が変わるといっても大きな特長である。

家事、家庭管理の相互理解は家族それぞれのもつ家事能力に大きく影響を受ける。家事能力は男女を問わず人格や教養の一部として、これからの家庭の維持・存続に関わる問題として重要な意味をもつものである。この能力を培うのに大きな役割を果たすのが住まいのあり方である。家事はいつでも、誰でもが手を出しやすいように、便利に楽しくみんなが使いやすいように設備や空間を整えておく必要がある。そして親から子への家事学習が無理なく実行できるような住宅計画が課題となってくる。

2 家事中心の住まい

いつでも、誰でもが家事に参加しやすい条件を満たすためには、家事空間をできるだけ開放的に集中化させ、しかも人が集まりやすい場所に設けることが必要であろう。自然に家族が顔を合わせ、会話が生まれ、何気ない日常の中から協力して家庭を運営する意識が育つ。その設定場所として相応しいのは食卓の場を含む「キッチン」回りであろう。

キッチン回りは料理を作るばかりではなくたくさん課題をもっていることで興味深い。家庭や学校での食生活全般にわたる実践的教育を食教育というが、豊富な食材、食品の中から健康によいものは何かを考え、どう選べばよいのか、美味しく食べるにはどうすればよいのかを体験的に子ども達に学習させる。献立づくりや買い物から子ども達を引き込み、健康や栄養について話し合う。この試みによって食事ばかりではなく生活全般に関する情報を横断的に身につけることをねらいとしている。料理や盛りつけ、食器の用意、食卓マナー、箸あしらいなど、これら基本的な食教育は、その後の人生を豊かにする条件ともなる。さらに、食事をすればゴミも出るし後片づけをしなければならない。食べ残し食品の保存、食器の洗い方、ゴミの出し方、資源の有効利用、環境問題への関心、そしていつもきれいで使いやすいキッチンの維持管理にいたるまで、教材となる事柄が多くあり、食教育は自立訓練への大きな役割を担っていることでその意義は大きい。

幼児からの食教育は、とりわけ小児成人病の問題を抱える欧米先進国で熱心な取り組みがみ

られ、幼児向けの料理本や教材、道具類が開発がされている。食生活、食事、食環境から心身ともに健康な社会を目指す努力は、究極のところ家庭教育の充実に向けられる。その目的をより効果的に実行するために、キッチン回りの設計は考慮されるべき事柄が多く存在する。

中心となる妻と夫、それぞれが忙しくコミュニケーションが乏しくなりがちな家庭にとっては、キッチン、食卓、居間、個室というような仕切りは、ますますふれあいの機会を少なくさせる。それぞれが違うことをしていても互いに見え隠れして相手の気配が感じられ、声をかければすぐ届くといった空間構成が望まれる。特にキッチン回りは誰であろうと料理の直接作業やその他の用事で滞留時間が長く、家族間の行き来が多い場所である。食卓を囲む楽しさともつながっている。そこを中心にして家事に関する設備を集中させれば自然なコミュニケーションが生まれる。洗濯、物干し、アイロン、繕いものなどの設備類や救急箱、工具類、生活小物の収納もキッチン回りに近づけることで家事の集中管理ができ、しかも家事処理方法が周知徹底し易い。さらにゴミなどの家庭廃棄物の保管場所、新聞古雑誌の置き場も確保したい。ゴミの分別、環境への配慮など廃棄物に対する知識にも家族全員の理解が必要である。最近ではこれにパソコン、ファックスなどの情報機器設備が加わる。これらの機器は操作を共有にする必要が出てくる。人とものが集まる場を積極的につくり、そこを有意義な出会いの場に利用する。家事に吸い寄せられるように人が集まり、それによって家族の立脚点を確認する。つまり充実した家事空間を設けることによって、住まいは人を育てることを可能とするのではないだろうか。そして家事を通して家族間の相互理解と協力関係は深まり連帯感は強化されるものと考えられる。

3 家族の絆の再生・家庭文化の継承

戦後の新しい時代に向けた住宅建設は、機能主義に基づく住宅計画を生みだし、公私室型住宅を定着させた。それは壁をつくり、部屋の用途を規定し無駄な空間を排斥した。その結果、一旦建設されれば変更不可能な強固で柔軟性に乏しい住宅が出現することとなった。もちろん公私室型住宅の理念はわが国の住宅建設、住宅計画に多くの成果をもたらし、住生活の向上、近代化に貢献があったことを否定するものではない。しかし、定型化、規格化が極端に進行した公私室型住宅の住宅観は、在来の日本住宅が備えていた緩やかな間仕切り、融通性のある住まい方、転用性に満ちた空間利用などを軽視し、それとともにそこに存在した家族関係、家族の絆を醸成していた情緒的空間をも失う結果となったが、それらは今までの反省として把握しておく必要があるのではないだろうか。

細分化された各部屋は家具に占有され、住宅の狭小感を増大させ、加えて人間関係も分断させる方向に導いたドアと壁は、空間を自由自在に用途変更し、多重に使いこなす知恵と技術を衰退させた。生活の中から自然発生的に空間を成立させ創造する能力を培うことを忘れさせてしまった。自分達なりの工夫を加える余地はなくなり、どこにも属さないどうにでもなるような曖昧な空間は消失してしまった。

しかし生活は常に流動的である。特に最近では社会情勢の変化に応じて家庭の恒常的安定期間は短縮され、家族の状況が変わりやすい。住空間は不変で堅牢な内部空間をもつよりも、その時の状況に応じて作り替えのできる融通性がより求められてきている。そして家族のライフスタイル、ライフステージによって住宅の内部を自由に作り替えられることと弱体化する家庭機能の回復とは無関係ではないと思われる。

家族年齢や家族構成によって家族同士がその関係を最も密着させなければならない時期、特

に子どもが小さい時には、住空間はできるだけオープンにして常にコミュニケーションがとれるつくりにし、また違う要求がでる時期には空間を仕切る。時と場合に応じて大きく使ったり、小さく仕切ったり、同じ空間が伸びたり縮んだりして家族の要求を充足しつつ独立性を尊重し、家族の集合しやすい場所を設ける。家庭の中で孤立する個人をつくらず、しかし必要なときには閉鎖した独立空間をもつことを可能にするという配慮は一層求められてきている。そしてこれは自分達の力で変更可能にすることが大切である。先人はこれをふすまと障子で行ってきたが、現代にそれをそのまま使う訳にはいかない。ふすまと障子では心許ないが、それに変わる可変装置で対応できるように初期の段階から計画をしておけば可能である。構造は大きく強固であり、内部は使い方において柔軟性、可変性をもつ住宅のあり方は、家族の絆の再生や親から子ども世代へと伝わる家庭文化の継承に何かしらの新しい可能性が期待できるのではないかと考えている。